View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kurume University Institutional Repository

久留米大学文学部紀要
国際文化学科編第二十六号（二〇〇九）

江戸時代漢学者の「語録」とその周辺

―河口静斎『秉筆録』―

大庭卓也

【欧文表記】Takuya OHBA, Analects of Japanese Scholars of the Chinese Classics in the Edo Period and Others: Kawaguchi Seisai "Heihitsuroku"

【要旨】江戸時代における随筆類の文学史的研究は、いまだ充分になされているとは言い難い。本稿では、こうした現状から前進すべく、随筆のうちでも、特に漢学者の言葉を書き留めた「語録」とでも呼ぶべきものをとりあげて、その文学史的意義を考察する。より具体的に言えば、江戸時代中期の漢学者河口静斎（元禄十六〈一七〇三〉―宝暦四〈一七五四〉）の語録『秉筆録』（祐徳稲荷神社祐徳博物館所蔵写本四冊）を材料とし、本書が、新旧の交替のめまぐるしい正徳、享保文壇を如実に物語る好資料であること、また、木下順庵門下、いわゆる「木門」の人々の直談やエピソードを多く含んで、木門を考えるうえでも有用であることを明らかにする。

【キーワード】江戸時代中期、漢学者、儒学者、随筆、秉筆録、木門、古文辞派、鹿島鍋島藩

一

江戸時代の文学研究において、随筆類の活用を力説した森銑三は「江戸時代の随筆」のなかで、江戸期随筆の特色を次のように析出している。[1]

① 漢学者によってまず作られはじめ、江戸後期にいたるまで漢学者の随筆が依然として多く見られる。

② それらには、漢文で書かれたもののほか、仮名交り文で書かれたものも多く、見るべきものが多い。

③ 国学者の随筆は、文章が擬古にとらわれ過ぎており、かえって漢学者による仮名交り文の随筆の方に、読むに足るものが多い。

こうした、漢学者による随筆の積み重ねが底力となり、江戸後期には、戯作者山東京伝らによる考証随筆をはじめ、それまでの随筆が扱わなかった、新たな領域を叙述する種々の随筆が書かれるようになり、「随筆時代」とも呼ぶべき時代をむかえるとしている。

より大きな視点からとらえるならば、これら随筆はすべて、中村幸彦が「近世圏外文学談」[2]において説いた、いわゆる「圏外文学」の範疇に属するものと考えてよいであろう。「圏外文学」とは、幸田露伴が提唱したもので[3]、純粋に文学とは言えぬまでも、文学に隣接する類の書物を言う。これをうけて、中村は江戸時代の圏外文学に、①教訓書、②旅行記・地誌、③軍書、④見聞集・巷談集、⑤伝記的読み物、⑥春本、⑦随筆、の七種を数え、研究の必要性を説いたのであった。

以上のような先学の研究を踏まえ、「圏外文学」の数々には研究の進展が認められるのであるが、課題もまだ多く残されているというのが現状である。例えば、森が大きくその特色を認めた、漢学者による随筆にしても、新旧両版の日本古典文学大系において、清田儋叟『孔雀楼筆記』、田能村竹田『山中人饒舌』、伊藤仁斎『仁斎日札』、堀景山『不尽言』など、計六点に注釈が施され、大きな成果を示すものの、なお見るべき書目は多いことも事実である。

いま、ここで論じようとするのは、随筆のうちでも、漢学者の言葉を書き留め、彙集したものである。内容は、中村の分類で言えば、④見聞集・巷談集と⑦随筆にまたがるものである。「聞き書き」と呼ぶ方が、あるいは適切かも知れないが、例えばよく知られる、荻生徂徠の『徂徠先生答問書』のように、ある人物の問いに答えた書簡を一書にまとめたものをも、視野に入れて考えたい。書簡の文章も、書き手の「言葉」をみずからが記録したものと言われないではない。よって本稿では、範囲を広義にとらえて、仮に「語録」の称を用いておくことにする。

この種の書物は、写本で流布するものの方に、遠慮や屈託のない発言が圧倒的に多く見られ、文学史研究のうえで好資料となる場合が少なくない。しかしながら、研究界の現状は、ごく限られたジャンルを除けば、写本類を精査する段階にまで至っていない。ならば、私に言う「語録」、それも写本で行われたものについて論じることは、こうした現状を反省する材料になるのではないか。かく考えて、本稿ではその手始めとして、江戸中期の漢学者河口静斎の「語録」である『秉筆録』をとりあげ、その特色、および周辺の問題を考えることとするのである。

二

河口静斎、通称は三八、名は光遠・利見、字は子深・穆仲、静斎・苧山と号す。元禄十六年生、宝暦四年十一月六日に五十二歳没。室鳩巣について学を修め、松平朝矩に仕えて川越藩儒となった人物である。既成人物事典の類につけば、静斎に関して、おおむねこのような記述が得られる。

知られるように、静斎の師室鳩巣は、木下順庵の高弟で、はじめ加賀藩儒のちに幕儒を勤めた人物である。順庵は、天和二年、京都の学者としては初めて幕儒に登用され、それまで林羅山の学統、すなわち林家が占有していた江戸文壇に、京儒進出のきっかけをつくった。以後、順庵が道をひらいて、新井白石、雨森芳州、そして室鳩巣ら高弟たち、いわゆる木門が各方面で活躍したことも周知の事実であろう。順庵が幕儒となった頃、福岡の貝原益軒にあてた書簡に、「…拙者学派、弥世間に広く成可申候と大悦

仕候。今迄は、林家ならでは公用不被相調様に御座候処に、如此御座候へば、上方学派瀰漫可仕候。貴様も同流の上方学派に御座候へば、ご満悦可成候。…」(4)との文言が見える。林家も木門も同じく朱子学系であるから、従来あまり注視されていないようだが、予想以上に林家に強い対抗意識を抱いていたと見るべきである。

かくて、木門の活躍は、元禄末から享保までの江戸文壇を高揚させた、ひとつの要因となった。こと文学に限ってみても、彼らの業績には、前時代にはない特色を認めることができる。たとえば、詩文集を数多く刊行した点である。正徳元年来朝の朝鮮通信使と、木下菊潭、三宅観瀾、室鳩巣、祇園南海ら木門の七人との唱和集を集めて、正徳二年に刊行された『七家唱和集』（十巻十冊）あたりをはじめとして、新井白石の詩集は、『白石詩草』（一巻一冊）が同年に、『白石先生余稿』（三巻三冊）が正徳五年の成立、享保二十年に刊行を見ている。白石の知友の詩を集めた『停雲集』（二巻二冊）は、室鳩巣、南部南山、榊原篁洲、雨森芳洲ら、ほとんど木門の人々で占められ、享保三年序刊。また、享保六年に刊行された『八居題詠』（一巻一冊）は、白石の提案で、清人の「八居詩」に諸家が和韻したもの。新井白石の詩を巻頭に、室鳩巣の詩も見えている。当時にあって、林羅山、鵞峰、鳳岡ら林家の当主たちは別として、その傍系や門人たちは、詩集はおろか著述の刊行に関して、述べて作らずという態度を貫くのが普通であったことを考えると、木門の刊本詩文集の数々は、やはり一時の盛観を極めている。彼らは、その意味において新興の詩人集団であった。

また、彼らの著述のうち、こうした詩文集の傍らに目をむけると、実に多くの随筆作品があることに思いいたる。これもまた、前時代には見られなかった傾向である。先掲の、森銑三「江戸時代の随筆」では、新井白石『白石先生紳書』、室鳩巣『駿台雑話』、雨森芳洲『たはれぐさ』などを挙げつつ、漢学者の和文随筆に見るべきものが多い点を言い、あわせて、木門に次いで文壇を風靡することとなる護園古文辞派の人々には、この類の随筆が、概して少ないことを指摘してもいる。氏が挙げたもの以外にも、木門による仮名随筆に、榊原篁洲『榊巷談苑』があり、漢文随筆まで視野に入れるならば、祇園南海『湘雲讃語』、雨森芳洲『橘窓茶話』、同『芳洲口授』など、より多きをあげることができる。森氏は控え目に指摘しているが、木門の文学の特色として、随筆家の一面もいま少し意識的に、かつ系統立てて強調すべきであろう。彼らは新興の詩人集団であると同時に、新興の随筆家集団でもあったのである。こうした特色は、河口静斎の著述にも現れており、彼にも『静斎随筆』という和文随筆の著がある。本書が『秉筆録』を考えるうえで、若干の伏線をもっていることは、のちに述べよう。

河口静斎の青年時期は、ちょうど、木門が文壇においてかように新機軸を打ち出していた頃にあたっている。『秉筆録』の編者、霜邨長盈は跋文で静斎の経歴を記して、はじめ三宅観瀾に業を受け、のちに室鳩巣に学んだとも言う。長盈は後述するように、静斎に師礼をとった人物であり、その言は傾聴すべきである。すなわち、静斎は、鳩巣ひとりではなく、多くの木門の先輩たちから、直接間接に刺激を受け、誘掖されたと考えてよいであろう。

また、静斎を考えるうえで、特筆すべきは、肥前鹿島六代藩主

鍋島直郷との親交であろう。鹿島藩主代々の事歴を編述した『御年譜』（祐徳稲荷神社祐徳博物館所蔵写本十冊）のうち、巻五に直郷の年譜は収められるが、その宝暦元年、直郷三十四歳の条に、

　此御在府中ヨリ、松平大和守ノ儒臣河口静斎　三八ト称ス。名ハ利見、字ハ穆中、太初先生ト号ス。ヲ招キテ、新註孟子ノ講ヲ聞玉フ　静斎ハ室鳩巣先生ノ門人ニテ、伊洛ノ淵源ヲ究メ、唐詩、文章共ニ傑出ノ人也。公、今年、三嶽山後記ヲ撰セシメ、社司森三河ニ賜リヌ。

と、静斎を招いて『新註孟子』の講義を受けたことが記されている。直郷の祖父、四代藩主鍋島直条は、二百余巻にものぼる詩歌、随筆類の草稿群『楓園家塵』を残すほど学芸に力をそそいだ人物であった。近時の研究によれば、直郷もまた大いに文事を好んで、祖父直条の『楓園家塵』を家学として伝承しようとしていた点、また、和歌を鴛河伸也（おしこのぶなり）に、漢文学を河口静斎に、垂加流神道を井田道祐について学び、それら伝授資料の蒐集に努めていた点などが明らかにされている。[5]

　静斎の著述は、そのほとんどすべてが写本で行われ、しかも残存すること自体少ないのであるが、直郷が静斎を漢文学の師として仰ぎ、静斎の著述類を蒐集してくれていたおかげで、かろうじて散逸を免れた例が少なくない。川越藩儒の著述が、遠く離れた西国鹿島の地にかえって多く残されることとなったのは、何とも奇しき縁と言うべきである。いずれも伝本稀な書物であるから、次には、祐徳稲荷神社博物館に直郷旧蔵書として残される静斎の著述を概見し、そのうえで『秉筆録』の性格をも見定めておくこととしたい。

三

　第一に、『苧山集』、写本四冊。静斎の詩文集である。書名の「苧山」、「苧」は「麻」の意で、松平朝矩の麻布邸に住んだことによる、静斎の別号である。現時点で所在が知られるのは、この祐徳博物館の一本のみである。各冊に巻数は与えられておらず、また、製作年時による配列もまま乱れている点から、おそらくは稿本を書写したものと思われる。第一巻に相当すると思しい冊の内題に「静斎先生詩集」と言い、そのなかほどに「右、五十六首、旧稿を友人の処に得、附して此に録す」（原漢文）との註記が見え、本書が静斎自身の編集に関わることが知られる。

　以下三冊に、享保十年～宝暦三年の諸体の文章三十首を収録する。とりわけ目をひくのが、うち一冊の冒頭に置かれる「斯文源流」である。藤原惺窩から説き起こし、幕初より宝暦にいたる儒学諸流の動向と人物を、和文で論評した好著である。木門を特記するのは、静斎としては当然ながら、江戸、京都、尾張、筑前、薩摩などバランスよく各地の学問に目を配り、それぞれの長短を記しえて公正な態度を堅持している。伊藤仁斎、荻生徂徠らの古学は「明末諸儒の余唾を拾ふ」に過ぎぬとするのも的確な指摘であろう。また、室鳩巣と三宅石庵（三宅観瀾の兄）が、中江藤樹をもっとも敬慕していたことや、鳩巣が加賀にいた頃、崎門派の羽黒養潜の門人たちを吸収したのが、わが門流のはじまりであると言うなど、鳩巣の直談が見えるのも有益である。なお、この「斯文源流」は、単独で宝暦八年に刊行されている。静斎の著述

としては唯一の刊本である。

ちなみに、十七首収録される序跋のうち、「篆書唐詩選五言絶句跋」「同序」「同跋」の三首は、関口黄山編『篆書唐詩選五言絶句』（宝暦二年序刊一冊）に寄せたもの。ふたつの跋は代作であり、刊本では官医の杉浦昌順、書家の関思恭の跋文として置かれている。本書には、静斎をふくめ五人が序跋を寄せているのだが、『苧山集』と照合することにより、静斎が三人分を書いていたのが知られるのも面白い。静斎の跋は、自書したものを版下に用いて、彼が唐様（からよう）の書もよくしたことを伝えている。

図１　関口黄山編『篆書唐詩選五言絶句』（宝暦二年序刊一冊）河口静斎序部分

第二に、『静斎詩稿』、写本一冊。静斎の詩集である。収録の詩は、『苧山集』の「静斎先生詩集」とは重複しない。享保十三年、幕府に献上された象を詠む「詠象三首」や、応酬相手に、梁田蜕巌、桂山彩巌らの名が見られる。およそ享保半ばより寛延頃までの作を集めたものと思われる。

第三に、『享保善政録』、写本一冊。書名が示すとおり、吉宗の善政を漢文で礼賛したもの。享保十三年成立。見返しは刊本の意匠に擬して、「享保善政録」と中央に大書し、両脇にやや小書きの文字、右に「享保万年之第十三祀歳在戊申」、左に「白河郡草茅臣河光遠薫沐謹撰」がある。これは鍋島直郷の好みであり、彼の自著数点にも同様の刊本風の見返しをもつものがある。また、本書に捺す「西園翰墨林」（朱文方印）は、直郷使用と思われる蔵書印。印文を、盛唐の詩人張説の五言律詩、「恩制賜食於麗正殿書院宴」（『唐詩選』巻三所収）の第二句に採る。吉宗の将軍襲職より筆を起こし、目安箱や施薬院の設置、孝子の顕彰など、計二十二条を記す。なかに、木下菊潭（順庵の長子）、室鳩巣らに講書を命じたことや、鳩巣に『六諭衍義』の大意を和解させたことなど、木門の活躍も合わせ記している。

そして最後に、第四として、『秉筆録』である。各冊、『享保善

政録』に同じく、「西園翰墨林」の蔵書印がある。構成は春、夏、秋、冬の四集に分った写本四冊。夏集の冊は、表紙の糊付けがあまくなって、一枚下にある共紙の原表紙が見える程にめくれる箇所があり、そこに「博聞録　二」という文字が見える。当初はこの名で呼ばれたのであろう。尾に、直郷の儒臣霜邨長盈によって宝暦六年八月既望、漢文で書いた跋文が付せられている。宝暦六年は、静斎没後二年目にあたる。

それに曰く、わが直郷公は、静斎先生の盛名を聞き、長い間面識を得たく思っていた。そこで私、長盈をまず先生の門に遊ばせ、そのうえで先生をお呼びになり、「新註孟子」を講ぜしめた。以後数年の間、直郷公は、月に五、六度講義を受けられ、講終われば先生とともに語り、酒をくみ、詩を詠んで親交を深めた。つねに末席にあった私は、先生の語るところあれば筆をとり書き留めていたが、寛延三年より宝暦三年の間で、それが相当の分量をなした。先生の亡くなったいま、直郷公の賢を求める意を讃え、静斎先生の道を広めようとする志があまねく世に伝わらぬことを惜しみ、本書を編んで「秉筆録」と名づけた、と。

先に掲げた直郷の年譜の記述を、詳しく補足するとともに、本書が静斎の没後、霜邨長盈によって、そしておそらくは直郷の命によって編まれたものであることが知られる。長盈が跋の冒頭で「『秉筆録』は、静斎先生の譚話する所を以って、焉を録す。蓋し、語録の類なり」と言うように、本書は、「語録」と呼ぶのがもっとも相応しく、純粋な意味で静斎の著述とは言えない。河口静斎述、霜邨長盈筆録とするのが適切であろう。

漢字片仮名（一部、平仮名）交りで書き留められた静斎の話は、

図２　『秉筆録』（祐徳稲荷神社博物館蔵写本四冊）春冊冒頭部分

九百余条にのぼる。話柄は、和漢の学芸から当代人の逸話まで万般におよび、きわめて多彩である。長盈の努力によって伝えられた、これら話の集積は、ただに、著述の多く残らぬ静斎の学術と文芸を考える好個の資料であるだけでなく、以下の諸点のうえにも意義が認められるであろう。

まず、好学の大名が学者を招く例は多くあるが、その際、いかなる知識が求められ、与えられていたのか。静斎は漢学の師として直郷に招かれていたというものの、本書には漢学以外の話の方がむしろ多く書き留められている。本書につくことで、大名の学芸受容のありかたが、また当時の漢学者の果たしていた役割が、つぶさに知られるであろう。

次に、本書をひもどくことは、漢学、すなわち儒学という学問の幅の広さを再認識するうえで有効である。「格物致知」「格物窮理」といった儒学思想を日常に実践すれば、自然、耳目のふれるものすべてに関心をよせ、分析することになる。静斎の話があらゆる分野を覆うのは、そのためである。かく日常に根ざしていたはずの儒学を、いま言う「哲学」と同義にとらえ、その文化的意義をいたずらに狭めて考えることが、一般の認識となっているのではないか。江戸時代の文学において漢文学が占める比重の大きさは、除々に解明されつつある一方、漢学者たちの事蹟を研究の対象とすることに、一抹の違和感を覚える傾向が文学史家の間に依然としてまま見受けられるのも、こうした認識の延長線上にある問題である。直郷のような好事の大名が、静斎の話により知識欲を満たしていたという一事は、当時の文化や生活のなかに、儒学がどのように迎えられ、そして定着していたのかを考えるうえで、やはり大きな示唆を与えるものでなければならない。

さらに本書は、新旧の交代が著しい正徳、享保文壇を物語る証言集として貴重である。静斎の時代の江戸文壇は、木門、荻生徂徠の古文辞学派が江戸に興り、旧勢力と並立することで一時代を画していた。写本で伝わる本書には、そうした文壇の赤裸々な証言が集積されているのである。しかも、静斎の証言は、室鳩巣や三宅観瀾をはじめ、木門の人々によるところが多い。蕓園古文辞派の人々の言説や噂を集めて写本で行われるものに、編者未詳の『蕓園雑話』があるが、本書は内容から見て、さしずめ「木門雑話」とも呼んでよさそうである。文学史上の位置づけがいまだ不充分とされる木門[6]を考える資料としても、本書の価値は大きいと言わなければならない。

以上、鍋島直郷の旧蔵書中に見える静斎の著述を概見して、それらのうちでも『秉筆録』がもっとも内容に富むものであるということを述べ来たった。いま、少しくその内容に立ち入るべきであろう。

四

『秉筆録』の文学史研究に資するところを論じようとする本稿の目的からすれば、まずは、本書に垣間見られる静斎の文学観を分析するのが筋道である。

本書には、和歌にかんする話が多く見えている。これらは、深く和歌を嗜んだ直郷から求め、あるいは静斎の方が直郷の嗜好に合わせて語ったものであろう。古今の和歌の抜き書きから、当時

風歌物語ともいうべき、当代歌人のエピソードまでさまざまである。いま、もっとも多く、静斎の歌話が書き留められる秋集を例に、そこに登場する歌人を列挙すると次のようになる。

脇坂甚内（秀忠に素姓を尋ねられ詠んだ歌）、後水尾帝（煙草・寄壁恋歌）、霊元帝（「の」字の多い歌）、同（修覚寺村林丘寺宮へ御幸の折の歌）、中御門（冬日公宴御会の歌）、武者小路実蔭（水無瀬法楽の夏恋の歌）、中院通茂（同）、明恵上人（「耳なし法師が母御前へ」と署名ある歌）、逍遙院実隆、後花園院（歳暮の歌）、能因法師と藤原定家（歳暮の歌）、良純入道親王（甲州に流罪となり詠んだ歌）、亀井壱岐守内四十川氏（すいばつを詠んだ歌）、蒔絵師幸阿弥伊予（禁裏へ献上の盃を詠んだ歌）、為春（正木為春か。歳旦の歌）、大内義隆の妻（義隆の妾に贈った歌）、武者小路殿（富士の歌）、大坂門徒寺の道心坊、松平大和守直矩（辞世の歌）、野々宮定基（「蛾眉山月」の歌）、伊達正宗（辞世の歌）、鍋島和泉守（延宝の頃、和泉守詠と伝えられた歌）、豊蔵坊信海（松平大和守より葡萄と梨を贈られた礼に詠んだ狂歌）、伴将曹、中院通茂（経書の語を詠む歌）。

こうした歌話の合間に、静斎の和歌観を察せられる話が、時折書き留められている。例えば、静斎が和歌の理想を説くときに用いる概念として、「怨而不怒ノ躰」というのがある。

大内義隆ノ本妻ハ、一条ノ一忍軒ノ姫ナリ。義隆ノ寵ヲトロヘテ、妾ヲ愛セラレシニ、其妾ノモトヘヤラルヽ文ヲ、本妻ノ許ヘ取チガヘ来リケレバ、ヒラキ見テ、其処ノ奥ニ、

身をつみて人のいたさぞしられけり恋しかりせば恋しかるらん

ト書付、聊ウラムル色ナク、元ノゴトク封シテ、妾ノモトヘトヽケラル。是ハ慈鎮ノ、

身をつみて人のいたさぞしられけりいのちはおしき物としらずや

ト本哥ヲ翻案セラレシナリ。サスガ一条殿ノ姫ホドアリテ、詩ノ「怨而不怒」ノ躰ニカナヒテ、女ニマレナル、ヤサシキ心バヘノ哥ナリ。静斎、此類ノ哥ヲアツメテ、『詩経』ノ体ニナライ、哥物語ヲ作ラント思ヘド、未果サズ。第一ノ関雎ノ所ニハ、衣通姫ノ「我せこ」ノ哥ヲ置ベシ。誠ニ有難キ御詠ナリ。扨ハ、定家、俊成ノ「ながらふる命ばかり」ノ哥、「うき身をば我だにいとふ」ノ哥ナドナリ。（秋集）

孔子が『詩経』関雎の詩を評した言葉「哀而不傷」（『論語』八佾第三）は、激しい感情をあらわにせず中和を得た理想的な詩を言うのであるが、静斎が用いる「怨而不怒」もほぼ同義の語として考えてよいと思われる。引用の後半に言う、この体の和歌を『詩経』の部立に並べる「歌物語」は完成しなかったようだが、その書に入るべきものとして挙げる、定家の「ながらふる命ばかりを」歌、俊成の「うき身をば我だにいとふ」歌に関して、また別の条では、

能因ノ哥ニ、

なげきつゝことしも暮ぬ露の身のきえぬばかりをおもひ出にして

是ハアマリシキ哥ナリ。夫トハチガイ、同ク歳暮ノ哥ニ、定家、

ながらふる命ばかりをかごとにてあまた過ぬる年の暮かな

此哥ハ、同ジ趣向ニテ面白クキコユル也。哥ハ人情ヲノブル物ナレバ、カヤウノ処ニテ、人ノ心術アラハルヽ也。又俊成ノ、

うき身をば我だにいとふいとへたゞそをだに同じ心とおもはん

是等ハ、『詩経』ノ「怨而不怒」ノ心ニカナイテ、カクコソアルベキコト也。（秋集）

と、やはり「怨而不怒ノ躰」であることを評価し、そして同じ文脈のなかで、「哥ハ人情ヲノブル物ナレバ」と、和歌の本質は人情の表出にある点が述べられている。

こうした片言をつなげて考えてみると、木門のなかでも詩人として名高い祇園南海の、「凡ソ、此趣向ニ作得バ、詩経ノ哀而不傷ノ心ニ叶ヘリ。人ヲモトガメズ、我身モウラミズ、了簡シタル最殊勝ナルベシ」（『明詩俚評』）、「思フ品ヲモ不言、怨ノ字モ不用、妙々」（同）、「詩ハ人情ヲ吟咏スル声ノ道具ニシテ…」（『詩学逢原』巻上）といった詩論「影写説」と相似た文学論を、静斎の胸中にも思い描くことができそうである。直郷は鴛河伸也について和歌を学んだということであるが、かく考えてくると、こうした木門の人々に通底する対詩経観というフィルターを通したかたちでも、和歌を学ぶところが多かったのではいかと思われてくる。

「当時スタレタル者ハ、連歌ナリ。連歌師トイヘドモ、好ム者アルコトヲキカズ」（夏集）という状況であったから、静斎も連歌はさして好まなかったと見える。『秉筆録』で連歌が語られることはいたって少ない。対して、彼が俳諧に大きな関心をよせていることは注目されてよい。思えば、木門には、俳味を解する士が多い。新井白石は若い頃、芭蕉と競り合うほど俳諧に熱中し（『兼山麗沢秘策』）、また祇園南海も、半時庵淡々の俳文集『淡々文集』（寛保二年刊三冊）に漢文の序を寄せて、俳諧の滑稽に大きく賛同していた。本書の序を撰んだもうひとりの漢学者に、其角に俳諧を学んだ明石藩儒梁田蛻巌があって、彼は木門ではないが、前述のとおり『静斎詩稿』にその名が見え、また『秉筆録』には、蛻巌からの直談として、菅得庵が弟子に殺傷された話（秋集）が書き留められるなど、静斎と交誼があった人物である。『秉筆録』に、静斎が披露した俳諧に関する話が散見されるのも、こうした時代の反映とみなければならない。

芭蕉と其角の墓に詣で、其角の墓に「宝晋斎墓」と刻するのを見て、「是ハ易ノ晋卦ニ、晋其角トアルヲトッテ其角ト号シ、晋子トモイヒシ也」と考証し（春集）、芭蕉門人の乙由や、江戸前期、大坂の和学者白井宗因の発句を紹介したり（夏集）、幕府御坊主衆出身で異色の江戸座俳人、寺町百庵の消息を直郷に伝えたりもしている（同）。また、春集に見える別の一条には、馬光という旗本が詠んだ発句「夕顔の重さやいかに岡の腕」の季節について、静斎が播州の室に逗留中、土地の俳諧者と議論となり、江戸に帰って「朋友ノ誹者」に問い合わせたなどという話が延々話されている箇所も見える。静斎の考証に「此句、夏トモ秋トモ季ヲ定メガタシ。源氏夕顔ノ巻ニ、扇ニ載セタルコトアリ。又、夕顔ノ蔓ニ毛ノハヘタルコトナドアル故、鬼ノウデト取アハセタル者トミユレバ、夏ニシテモヨシ。又、夕顔ノ実ニスレバ、秋ニシテモヨシ」と生真面目に恂々と説いてやまないところに、その関

心の深さがよく表れている。句の鑑賞にまで踏み込んだ話も本書には散見しており、

〇買てゆけ沓十六の風車

淡々ガ江戸ヘ下リテ帰リ上ル時ノ句也。是ハ、司馬相如ガ「大丈夫不乗駟馬車、不過此橋」ト云タル心也。駟ハ馬四疋ナル故、其沓十六アル筈ナリ。我ハ駟馬車ノカワリニ、風車ヲ京土産ニカフテ行ント也。（夏集）

〇頃日、人ノシタル句トテ、静斎ヘ見セケル。「郭公空にしらせんはねつるべ」。此句ノ「ハネツルベ」、イカナル心ニヤ問シカバ、静斎戯レニ答テ、「しらせん」ト、ハネタルカナユヘ、「ハネ釣瓶」トシタル者ナラント云。其人、達セズ一笑。（同）

二つ目の鑑賞は、少し衒学臭に過ぎるが、常日頃から彼なりの鑑識眼をもって俳諧に接していたことが思われて好もしい。直郷は特定の宗匠について俳諧を学んではおらず、俳諧については、こうした静斎の俳話により多くを学んだことと思われる。

先に述べた和歌観もそうであるが、右のような俳諧への関心は、漢学者としては当然中心にすえる詩論から派生しているのであって、詩と俳諧を合わせ論じる、次のような見解も打ち出されている。

京師ノ詩、俳諧トモニ、トカク山林幽隠ノ体ナラデ出来ズ、豪傑花麗ノ気、絶テナシ。朝廷ノ衰微故、人心モフリタヽヌト見ヘタリ。江戸ノ者ハ、メツポウニ不敵ノコトヲ云出ス也。

俳諧ノ句ニ、

からの蓋する黒田鍋嶋

日本の慮外三保ずつとでる

日本のせゝなぎ白し年の暮

楊貴妃のあかゞり見たりけさの雪

あくびの口にはいる遠山

鎗がふつても武士のきぬ〴〵

又、了佐ガ句ニ、

梅屋敷亭主たしかにたわけ物

此類ナリ。（秋集）

京都の詩と俳諧の作風が「山林幽隠ノ体」であるのは、朝廷が衰退して人々の心も奮い立たぬためであり、対するに、江戸は幕府を擁して力があるから、その作風は「豪傑花麗ノ気」があり、「メツポウニ不敵ノ」気味があると言う。例えば、京都の石川丈山の隠逸を愛した詩と、江戸の荻生徂徠の盛唐詩を範とした詩を思い浮かべれば、静斎の言うところはおのずから明らかであろう。もしかするとこの条は、京都と江戸の詩風の違いを、わかり易く俳諧を例として説いたものであったかも知れない。

五

次に、『秉筆録』中の話を拾いつつ、正徳、享保文壇を顧みることにする。

静斎が『斯文源流』で批判的に言及していたように、荻生徂徠を盟主とする古文辞学派は、破壊的な言説で学界を驚かせ、当代の人々にとって注視の的であった。『秉筆録』においては、静斎はより一層雄弁に、徂徠の評判を語っている。その若干を次に掲

げる。

○荻生惣右衛門、「聖人九等論」ヲアラハスコト、世間ニ出サヌ内、流布シテ専ラワルク云イ立。細川越中守ナド聞付テ、以ノ外不同意ノ由ニテ立腹アリシ故、終ニ世上ヘダサズシテシマイタリ。（春集）

○徂徠派ノ高上ナト云ハ、世間一統ニハヤル故ナリ。闇斎派ノ高上ナルモ、其時専ラハヤリタル故ナリ。ハヤラネバ、何ホド理屈ヲ云テモ、人ガ用ヒヌ故、独理屈ハイハレヌ者也。今ノ人ハ、徂徠ハ腹ノ内カラアノヤウニ高上ナ者カト思フテヲルハ、古キコトヲシリタル者ナキ故也。荒井（新井）発向ノ時ハ、一向頭ヲアグルコトナラズ。白石トキツク中アシク、白石ハ文昭廟ノ時、御近習ニテ、歯モキヽタル故、荻生ハ、中々役ニタツ者ニアラズト、ヲサヘ付テヲカレシ故、其時分ハ、徂徠モヲトナシキ身持ニテ、人ガ不便ヲ加ヘアレバ、「絶レタル器量ノ者ナリ。アヽシテ置ハヲシキ者ナリ」ト、雨森藤五郎、三宅観瀾ナド、殊外、心ヲヨセテ取立タル故、弟子ノ内ニモ、温厚ノ人物モ多カリシ也。其後、ムシヤウニ人ガ用ヒテ、ハヤリタツタル故、自負増長シテ、抗顔ニ天下ノ人ヲ目下ニミルヤウニハナリタリ。（春集）

○荻生惣右衛門ハ、女子斗アリテ嫡子ナク、一家アイダヨリ三十郎ヲ養子トス。モトヨリ、書生ノ業ヲヤムル心ナリシ故、三十郎ニハ学文モサセズ。然ルニ、近キ頃、当主柳沢家ヨリ家業ヲツグベシト命アリテ、儒学ヲ修シ、名モ惣右衛門ト改ム。マダ学文ハ未熟ナレド、大言ヲナス事バカリハ、養父ニモヲトラズト也。（秋集）

○「面似猿馬者有英雄」ト云ヘリ。然ルニ、徂徠面長ナリシ故、時ノ人、馬面先生ト云アヘリ。（秋集）

○江都ノ風俗、新奇ヲコノム故、朱学流盛ンニ行ハルヽ処ヘ、徂徠、新説ヲ出シテソシリ出シヨリ、其学ノ善悪モヱラバズ、ムシヤウニハヤリ立タリ。サレド今ニテハ、皆悉ク朱熹ソシリノ世トナリタル故、板行スル書トサヘイヘバ、同ク朱子ヲソシル書、サシテ見識モナク、クド〳〵ト同ジコトヲ云イ出ス故、メヅラシカラズ、漸々、好ム者スクナク衰ヘタリ。上方ハ、人ノ心正直ナ故、ソノ心カラ尤ナコトト見ルヨリ、今以、其心入ナル故、京、大坂ニハ徂徠説行ハルヽト見ヘタリ。（冬集）

「聖人九等論」は徂徠の文章であろうか。『徂徠集』にその名を見ない。あるいは一冊の書物としても、徂徠にそうした著述のあることを知らない。徂徠の没後、服部南郭ら弟子たちが、師の著述を纂訂した「物夫子著述書目記」（徂徠『中庸解』に付載して刊行）を見ると、意に満たぬとして徂徠みずから火中に投じて棄てた著述がいくらも見える。あるいは、その類のものか。徂徠が新井白石に頭があがらなかったという話は、雨森芳洲、三宅観瀾からの直談を静斎が話したものであろう。「馬面先生」との異名も、静斎の話にして私は初めて聞く。また、五つ目に掲げた条について、『秉筆録』の静斎の話が、霜邨長盈の跋文の記述により、寛延三年から宝暦三年頃のものであったことを考えれば、この時期、京坂に先だって江戸で古文辞学に対する反感が広まりつつあったというのも、従来の指摘とは少し異なるようである。

このほか、室鳩巣による講義の合間の談話や、その多くは観瀾

から聞いたかと思われる、水戸彰考館の儒臣の話、山崎闇斎ら崎門派の人々の話などもそれぞれに面白く、ひとつの学者評判集を編めるほどの分量をなすが、すべてを掲げるわけにはゆかない。ここでは、春集に見られる、木門の人々を紹介する条々を示して、舌足らずの点を少しでも補っておく。

○観瀾　三宅九十郎。其子岩次郎ト云。今、甲州ニアリ。

○錦里　木下純庵也。錦小路ニアリ。元来、京師ノ生レニテ、京ニ屋敷アリテ、加賀侯在国ノ時ハ、加賀ニイタリ、在府ノ時ハ、京師ニカヘリ居シナリ。

○田伯隣　増田助右衛門。白石門弟。詩人也。天満丁ニ五霊香ト云看板アリ。靄ヤト云テ、目薬屋ナリ。ソレ故、鶴楼ト号ス。大久保山城守、此人ノ弟子ニテ、鶴楼余稿ト云ヲ蘭亭ガアツメシニ、今、大久保家ニアリ。此鶴楼、詩ハヨホドヨクツクレリ。夫故、詩友多ク、八月十五夜ニハ、降テモ照テモ、毎年、詩友白石、鳩巣、観瀾等ヲ申シ請テ、中秋会ヲシタリ。後ニハ、白石、御近習ニナラレシ故、町屋ニ行事ナラヌ故、中秋ニハ、私宅ニ彼詩友ヲヨビアツメ、鳩巣ナド両天ノ時、コトハリヲイヘバ、駕ムカヒヲヤリテ、中秋会ヲセラレシ。

○南坡　相良侯臣。藤五郎子、雨森道哲。

○芳洲　雨森藤五郎。対馬。

○蘆徳林　陸奥内。芦孝七。

集大輿　阿波内。集堂直左衛門。

伊知章　先祖長門ノ人。伊東貞左衛門。親ノ代ヨリ江戸ニ来リ住ス。

田維則　松平右近将監内。多田義八郎。

山維深　山宮官兵衛。雪楼。元、岩城侯臣。今、松大和守内。

児図南　薩摩内。児玉惣四郎。後ニ主右衛門ト云。一鵬。希雲。

愛季平　サツマ内。愛甲源左衛門。右七人、鳩巣門人。静斎社友也。

○西山順泰　阿比留順泰。対馬人。阿比留太良八トハ別家ナリ。

○思聡　南部宗寿。加賀富山侯松平大蔵大輔臣。

○禎卿　松浦儀右衛門。対馬。

これらは、近接して列挙されており、おそらくは直郷の求めに応じて、自分の門流を紹介したものであろう。木門の裾野の広がり、それを構成する人々の経歴を知るうえでも有益である。秋集に、鳩巣と白石の経歴を詳細に話している条もあるが、いまは省略しておく。

最後に、春集で静斎が紹介する木門の人々のうちでも、『秉筆録』中にもっとも多く登場する、雨森芳洲をとりあげておきたい。

雨森藤五郎ハ、弓頭格ニテ対馬ヘツトメ、後ニ用人格ニナル。是モ朝鮮ノ倭館ヘ留守居ヲツトメ、能言語ヲモ通習ス。当年庚午（寛延三年）二八十三歳也。其子徳之允ハ、松浦儀右衛門養子ニヤリ、松浦文平ト云。（秋集）

と言うように、静斎が直郷と交誼をもっていた頃、芳洲はまだ存命であった。それとは明記せぬ場合もあるが、朝鮮通信使の様々なエピソードや、対馬および朝鮮の細やかな習俗、李氏朝鮮が設

けた外交貿易機関である倭館での見聞の話などは、通信使応接の実務を勤め、実際にかの地に往来した芳洲の直談と思われ、『秉筆録』のなかでも特に目を引く話となっている。

○朝鮮ニテ、書物ノツケ紙ノコトヲ聡明紙ト云。（春集）

○朝鮮釜山浦ニテ、毎年三月ニ藁人形ヲ船ニノセ、舟軍ノマナビヲスル也。是ヲ肥後殿ノ調伏ト云也。畢竟ハ、水戦ノナラシナルベシ。雨森徳之允ナドハ毎度ミタリ。徳之允ハ、朝鮮ニ久ク詰テ手習ナドシタリ。『蘭亭記』ヲナライシニ、此方ノ手習ノシカタトハチガイ、一字ヅヽ習ハセル也。夫故、『蘭亭記』ヲ半年モカヽリテ漸クアゲタリ。（夏集）

○朝鮮ニハ虎多シ。サレド、此方狼、山犬ナドノヤウニ、人家チカクキタラヌ物ユヘ、サノミ人ヲ害スルコトモナシ。…倭館ニモ虎ノ足跡アリシコトアリテ、甚ダ対馬人モ恐レシカド、終ニミヘズ。倭館モ四方屏ヲカケテ城ガマヘノ様ナレバ、虎ノ入ベキ患先ハナキコト也。…（秋集）

○…雨森藤五郎ガカタリシハ、対馬ニテ亀トヲスルハ、誰モナルコトニテ、小クキリテ用ル故、甲一枚アレバ、幾十度ノ用ニモタツ故、大坂ヨリミガキニシテ取寄、人々所持スル也。其法、火ニアテヽヒヾレメヲツケ、トホカミ、ヱミタメト云コトニテトナフ也。（秋集）

○雨森藤五郎曰、太閤ノ朝鮮陣ハ、日本ノ害ニハナリシカド、為ニナリシコトナシ。タヾ豆腐ノ製ヲナライ来リシ斗ナリ。（冬集）

○朝鮮人ハ、物毎、吾邦ヲ尊ビ、他邦ノ名産ヲ好マズ。自国ヲ以足レリトスル故、本邦ヘ来リテモ、諸器材ノ巧妙ナルヲ見テモ、嘗テ慕景スルコトナシ。…（冬集）

○朝鮮人、賓客ヲ迎ヘテハ、先ヅ人参湯ヲ出シテ客ニスヽム。則チ、独参湯ナリ。故ニ、鮮人御馳走ノ諸侯ヘハ、対馬侯ヨリ内意アリテ、鮮人ニ館中対面ノ時出ス処ハ、人参湯ナルコトヲ告テ、飲下スコトヲ止メラルヽトナリ。（冬集）

このほかにも、芳洲あたりの影響が大きいかと思われるのは、『秉筆録』に白話（中国俗語）にかんする知識が多く披露されている点である。例えば次のような語群、

一　傾城ヲ嫖子ト云
　一年に一度二度行者ヲ牛女嫖と云。稀ニ逢心也。
　月ニ一二度行ヲ　焼香嫖　寺参リスル心
　二日アイヲキ計ニ行ヲ　瘧嫖
　奇麗ニ遊ブヲ　清嫖
　セツナクアソブヲ　苦嫖
　タワイナクアソブヲ　溺嫖
　折々ユカヌヲ　過門嫖　折節見マイノ心
　茶湯嫖トモ
　見物バカリスルヲ　眼嫖
　年ワカナ妓女ヲ　雛妓
　トシマヲ　蒼妓　…（秋集）

中国の艶史小説のことが、直郷との間で話題になったのであろうか、各語の関連を探ってゆけば、二人が何について話しているのか分かりそうな白話の語群が散見されるのである。周知のとおり、芳洲は朝鮮語のみならず白話にも精通していたのであり、静斎がかように芳洲に親炙していた点を考えると、静斎の白話の知識修

得には、芳洲が貢献していたであろう。むろん「近来書生（きんらいのしょせい）、唐山音ヲ学ビ、小説ノ書ヲ翫ブコトトナレリ」（冬集）というように、徂徠ら護園古文辞学派によりもたらされた白話小説流行という、時代の影響も考えねばならないが、芳洲をはじめ、木門にも白話を学んだ人物が多い。こうした『秉筆録』に見える記事の数々は、静斎だけというにとどまらず、木門全体における白話愛好の風をはかる、ひとつの材料とすべきであろうと考える。

六

『秉筆録』は先述のとおり、静斎の没後に、その学徳を偲んで鍋島直郷とその儒臣霜邨長盈によって編まれた。現時点で、直郷の蔵書中にしか伝本のないところをみると、その読者は、おそらくは直郷の周囲に限定されたであろう。しかしながら、『秉筆録』と同種の書物にして、刊行されてより広く人々にひもどかれたと思われるものに、『静斎随筆』を挙げることができる。これは、蔵書家として名高い安中侯板倉勝明が、伝本の稀な江戸時代漢学者の随筆雑著を集成して刊行した一大叢書『甘雨亭叢書』中のひとつとして収められる。『甘雨亭叢書』、漢文作品を集める四十冊を正集、和歌、和文作品を集める十六冊を別集とし、弘化、嘉永頃の刊行である。『静斎随筆』は、別集の第三に配される。

中味を見ると、和文で書かれた計三十六条の記事のなかに、鳩巣や観瀾、芳洲からの直談が散見して『秉筆録』と相似るが、話柄は重なりそうでいて重ならない。『静斎随筆』と『秉筆録』を比較するに、前者が各条ことごとく「もこをはの事」「昭宣公の事」などのように標題が付けられ、漢字仮名交りの行文は推敲がゆきとどき、随筆として完成された姿をもっているのに対し、後者は箇条書き、あるいはひとつ書きに各条を列挙、行文も時折意味をとりかねる場合があり、口語的、俗語的な表現もやや混じっている。これは、長盈が静斎の傍らでその話を細大もらさず、かつ忠実に筆録しようと努めたために生じた結果であり、むしろ静斎の口調を伝えて好もしい。収録話数の多さとあわせて、『秉筆録』の特色として認めるべきであろう。

いまひとつ、『甘雨亭叢書』の『静斎随筆』について注目すべきは、杏花園大田南畝の筆写にかかる一本を底本に使用している点で、本文の奥に「静斎随筆抄写于鈴木白藤家云／杏花園」と言う識語がそのまま版刻せられている。識語に見える鈴木白藤は、昌平黌に学び、のち書物奉行を勤めた人物。南畝の畏友、蔵書家として知られる。抄写とあるからには、白藤が所持していた『静斎随筆』は、さらに多くの静斎の話が集められていたであろう。知られるように、南畝も板倉勝明と同様、稀書を広く求めて叢書を編んでいるが、そのうちのひとつ『三十輻（みそのや）』のなかに、静斎の著述『斯文源流』と『静斎詩稿』の二点を収めてもいる。静斎に注目していたのであろう。静斎の著述、なかんずく静斎の随筆に注目した人に、江戸時代後期を代表する文人、大田南畝があったことを記憶にとどめておきたい。

静斎の門人に、どのような人があったのか、詳細は不明といわざるをえない。ただ、門人のひとりとされる和田正路に、写本で流布する随筆『異説まち〳〵』（寛延元年奥書、巻冊数不同）の著があることは、静斎の随筆と関連付けて、ここに述べることが

許されようか。本書は、日本随筆大成本（新版第一期十七巻）によって見ると、四巻の構成で、武家の行実、世俗の巷談、近世初期版行の軍書、仮名草子類の批評などが目立つなかに、静斎先生の談なりとする条が若干見えている。静斎の随筆にくらべると、学問的な記述はいたって少ないが、筆者なりの見聞をよく記して、内容は豊富である。正路が意識したかいなかは別としても、文学史のうえでは木門の人々の随筆の系譜に、かすかに連なるものと言えよう。

註

（1）『森銑三著作集』（中央公論社　昭和46）第十一巻所収。
（2）『中村幸彦著述集』（中央公論社　昭和59）第十三巻所収。
（3）「圏外文学談」（『露伴全集』第十八巻所収）。
（4）九州資料叢書『益軒資料　六』（九州史料刊行会　昭35）所収。
（5）井上敏幸・松尾和義編著『鍋島直郷西園和歌集　翻刻と解説』（風間書房　平15）、井上敏幸編『鹿島鍋島藩の政治と文化』（人間文化研究機構国文学研究資料館　平20）。
（6）杉下元明『江戸漢詩　影響と変容の系譜』（ぺりかん社　15）。本書は木門に関する論考を多く収めており、氏は木門研究の必要性を喚起されている。

〔付記〕資料の引用にあたっては全面にわたり、私に濁点、句読点、読み仮名などを施している。ただし、片仮名の読み仮名は原文のままである。なお、本稿は、平成十八年六月、祐徳稲荷神社において行われた、国文学研究資料館主催の講演会「鹿島鍋島藩の政治と文化」における「漢学者河口静斎と『秉筆録』」と題する講演の内容に、加筆訂正したものである。資料の閲覧、掲載を許可くださった、祐徳稲荷神社祐徳博物館にお礼申し上げます。